# １．生の共同性からみた共同墓の展望

小谷　みどり（シニア生活文化研究所）

日本では、人が亡くなって以降のことは、家族や子孫が担うべきとされてきた。例えばお墓は、慣習に従って祖先の祭祀を主宰すべき者が継承すると、民法で規定されている。慣習（主宰すべき者）とは誰か、までは法律には明記されていないが、多くの人は、長男がお墓を継承すると思い込んでいる。次男や三男は新しくお墓を建てなければならない、結婚して苗字が変わった娘は一緒のお墓に入れないなどと思っている人も少なくないが、公営墓地や民間霊園では、一緒のお墓に入れる人の範囲は、「6親等内の親族、配偶者、3親等内の姻族」とされているのが一般的だ。

しかも、子々孫々で同じ墓石の下に遺骨を安置するようになったのは、火葬が普及してからのこと。今でこそ火葬率は99.9％を超えているが、1970年には79.2％で、50年前には5人に１人は土葬されていた。子々孫々で入るお墓にはそれほど長い歴史があるわけではない。「先祖代々」「〇〇家」と刻んだ墓石を建てるようになり、長男がお墓を継承するものだと私たちは思い込み始めたのだが、そもそも、こうした考え方は戦前までの明治民法下のものだ。

戦後、私たちのライフスタイルは大きく変わった。例えば子どもがいても、高齢期は夫婦のみで暮らす人が増えている。厚生労働省「国民生活基礎調査」によれば、65歳以上がいる世帯のうち、三世代世帯が占める割合は、1980年には50.1％あったが、2017年には11.0％にまで減少した。変わって夫婦のみの世帯が32.5％と、最も多い世帯構造となっている。ひとり暮らしも合わせると、高齢者の6割が、すでに独居か、将来的に独居になる可能性がある。長男夫婦が老親と一緒に暮らすという住まい方はもはや少数派だ。

ところが戦後70年以上が経過したのに、お墓の話になると、多くの人が戦前の思想にワープしてしまう。娘夫婦と暮らす二世帯住宅には、二つの苗字の表札がかかっていることが多い。これがおかしなことだとは誰も思わないはずだが、お墓に、苗字の異なる娘が一緒に入れないと思い込んでいることが、明治民法の呪縛なのである。繰り返すが、娘も息子も親からみれば一親等、きょうだいは二親等なので、苗字が何であれ、公営墓地やメモリアルパークと呼ばれる民間霊園であれば、一緒に入ることは何の問題もない。

寺院墓地の場合、お寺によっては一緒に入れる範囲を決めているところもある。例えば、実子と配偶者のみ同じお墓に入れると独自に定めているお寺では、こんなトラブルがあった。数年前に亡くなって、このお寺のお墓に母の兄を納骨したという男性は、ある日、お寺側から、「お墓を撤去して合葬するが、撤去されたくなければ900万円を払ってほしい」という通知を受け取った。母の兄には子どもがいなかったが、男性は幼いころから可愛がってもらったため、おじさんの死後、お寺の年会費を代わりに負担し、年に数回の墓参を続けてきたという。このお寺の規則では、実子ではない男性がお墓を継承することはできないため、お墓を無縁墓として撤去するか、男性が新しくお墓を建てるのに必要な永代使用料900万円をお寺に支払うか、という選択肢をお寺は提示してきたのだ。

配偶者と実子しかお墓に入れないという考え方は、これからの社会において破たんしつ

つある。そもそも配偶者も実子もいない人が急増していることもある。50歳時点で一度も結婚経験のない人の割合を示す「生涯未婚率」は、2015年は男性が23.4％、女性が14.1％だった。男性は長く「結婚して一人前」とされてきた風潮があり、1950年の数値は1.5％にとどまっていたが、1990年以降急増した。増加に転じたこの年に50歳だった男性がまもなく80歳を迎える。これからは、生涯未婚の男性がどんどん亡くなっていく社会が到来し、配偶者や実子がお墓を継承するのが当たり前、ではなくなるのだ。

実際、熊本県人吉市では、2013年に市内の全995か所の墓地を調査したところ、4割以上が無縁になっており、なかには8割以上が無縁墓になっている墓地もあった。東京都では2000年以降、年間管理料を5年間滞納し、親族の居場所が分からない無縁墓を撤去しているが、今後増える無縁墓対策として、撤去したお墓の遺骨を納められるよう、2012年に無縁合同墓を新たに整備した。

偕老同穴という言葉がある。夫婦が共に老い、死後は同じお墓に葬られるという意味だが、こうした考えを支持しない人もいる。夫婦でも先祖でもない人と一緒に入りたいという考えもそのひとつだ。自治体が運営する公営の共同墓もあれば、市民団体、お寺やキリスト教会などが運営する共同墓もある。いずれにしても血縁を超えた人たちで入る共同墓は、子々孫々での継承を前提としていない点が特徴だ。

こうした脱血縁墓のなかには、生前のつながりで、死後の共同性を模索する動きもある。例えば1999年に設立された兵庫県高齢者生活協同組合は、県内で5,600人ほどの会員を抱える組織だが、2014年、2017年にそれぞれ別の民間霊園に共同墓を建立した。「ひとりぼっちの高齢者をなくそう」「寝たきりにならない、しない」というテーマを掲げ、老いを地域や会員同士で支えあう仕組みを構築してきたが、死後もつながりたいという会員からのニーズが高まってきたのがきっかけだという。

生前にお墓を契約する会員が増えてきたことから、この組織では「永遠の会」を結成し、契約者と遺族を結ぶ会として、年に4回、ランチ会や合同慰霊祭など、会員同士の親睦を図っている。同じお墓に納骨されているという観点からみれば、「永遠の会」は遺族の共同体だが、いずれは自分もここに入るという観点では、死後の共同体であるともいえる。

高齢者住宅でも、共同墓を建立している。介護付き有料老人ホーム「宝塚エデンの園」は2010年、兵庫県宝塚市の市営墓地に共同墓を建立したほか、伊豆市にある有料老人ホーム「ライフハウス友だち村」は2012年に、神戸市のサービス付き高齢者向け住宅「ゆいま～る伊川谷」は2013年にそれぞれ民間霊園に共同墓を建てた。いずれも「子どもに迷惑をかけたくない」「墓の後継ぎがいない」との声が入居者から寄せられたからだという。

現に共同墓には施設の入居者自身だけではなく、先祖の墓じまいをして、遺骨を共同墓に改葬する入居者も少なくない。宝塚エデンの園を運営する社会福祉法人では、全国で運営する有料老人ホーム7か所のうち、6か所で共同墓を建立している。介護だけでなく、死後の安心も提供する仕組みだ。多くの共同墓では、入居者たちが年に一、二度お参りをする合同慰霊祭がある。終の住み家を同じくした人たちで、死後も共同性を継続していくという試みだ。

そこで本稿では、サービス付き高齢者向け住宅「ゆいまーる那須」における「生の共同性」と、居住者で運営する共同墓がもたらす「死の共同性」の関連について概観する。ゆいまーる那須は2010年に第一期、2012年には第二期工事が完了し、70戸全棟がオープンした。事業主体は、全国で高齢者向け住宅を企画している株式会社コミュニティネットで、2007年に開設に向けた実行委員会を立ち上げ、入居希望者から要望を聞いて、施設の設計やサービス内容に反映させた。

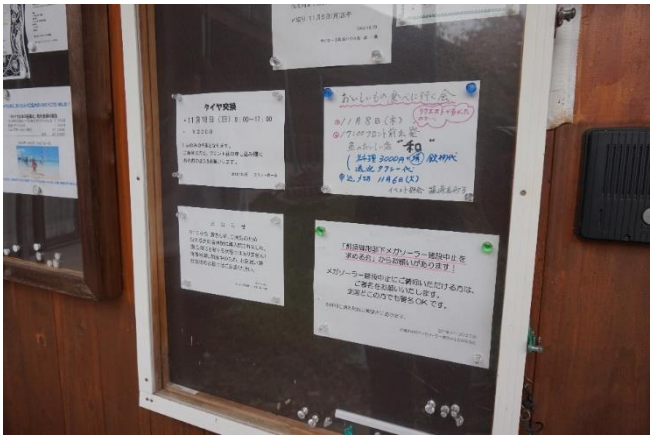
一戸の広さは33平米から66平米で、約1,200万円～2,500万円の家賃を一括して前払いすれば生涯居住できる。15年以内に退去、解約する場合には、経過した月数に応じて家賃一括前払い金は返還される。月額3万円～5万円のサポート費や食費、光熱費などはかかるが、常駐スタッフが日常生活の相談に応じるほか、敷地内には、外部の会社が運営するデイサービスセンターがあり、住み慣れた敷地内で介護を受けることできる。連携する医療機関もある。

ゆいまーる那須の居住棟概観

ひとり用居住室（キッチンからリビングを向いたアングル）

居住者同士が緩やかなつながりが持てるよう、70戸で一つのコミュニティを形成するのではなく、12戸から18戸ずつのユニットが5棟配置されている。長屋のように居住部屋が配置され、各住戸は中庭に向かい、お互いの気配をさりげなく感じられるようになっているが、それぞれの部屋は完全にプライバシーが保たれている。そのほか、食堂、図書室、音楽室などの共用室やデイルームがあり、ほぼ毎日、ヨガや体操、合唱、書道などのサークルが行われている。

入居者向けのアクティビティのお知らせ

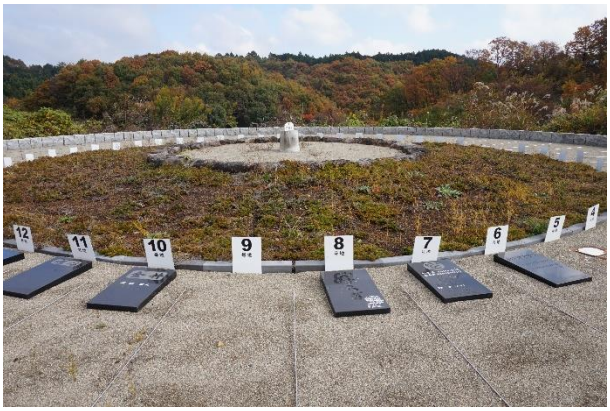


ゆいまーる那須のもう一つの特徴は、働きながら暮らすというコンセプトだ。庭の整備、隣接する牧場のえさやり、食堂で調理をしたり、皿洗いをするのも居住者だという。昼と夜の一日二食を食堂でとった場合、一か月の食費は一人当たり４万円だが、ランチは540円、夕食は760円に設定されており、一日だけ、一食だけ食堂で、という選択もできる。毎週土曜日は「ゆいまーる居酒屋」となり、地域の人たちも立ち寄る。筆者が訪問した日は、普段は東京に住んでおり、たまにここに過ごしにくるという女性を囲み、自分で作ったおかずや漬物をみんなでわけあったり、頂き物のお菓子をおすそ分けしたり、お土産のお酒をみんなで晩酌するなど、和気あいあいとした時間が流れていた。

夕食の様子　（持込もOK）

数年前、入居者から「死後もみんな一緒にいたい」という声があがり、車で15分ほどの場所の合葬墓をゆいまーる那須が契約した。まだ亡くなった人はいないため、慰霊祭などのイベントはないが、ペットの犬と一緒に入りたいと、犬の遺骨を自室に安置している高齢女性もいた。

ゆいまーる那須の共同墓




ライフスタイルや家族関係が多様化するなか、子々孫々でお墓を継承することが不可能な時代になりつつあることは自明だ。一方で、ここ10年ほどで、死後の共同性を目指した共同墓や永代供養墓が続々と登場している。しかしその多くは、遺骨の共同安置に過ぎず、死後の共同性を保証しているとは言いがたいのが現状だ。死後同じ共同墓に入る人たちを「墓友」と称する向きもあるが、墓友たちが生きている間、共同性と呼べるほどのコミュニティを形成していないからだ。

墓は、遺骨の安置場所以外に、遺された人が死者と対峙する場所という機能があるが、死後の共同性は、死者同士が死後に共同性を形成することは不可能である以上、遺された人たちが保証するしかない。つまり遺された人たちの共同性が、死後の共同性と連動することでしか、死にゆく人に対して死後の安心を与えられないのではないだろうか。これまでの「イエ」や「家族」、「地域」はまさしく、生の共同体であり、それが死後の共同性でもあった。その意味で、ゆいまーる那須のように、新しい生の共同性の構築が、死後の共同性の保証につながるのではないか。